

## Y02a 日本での天文教育分野の研究論文のサーベイ

富田晃彦（和歌山大学），縣秀彦（国立天文台），鴈野重之（九州産業大学），寺藺淳也（会津大学），松本直記（慶応高校）

日本での天文教育分野の査読を経た研究論文は、縣・鴈野・松本（天文月報 2015 年 8 月号）の指摘のように、中心的な学術誌がない、多くの雑誌に分散して発表、教育実践・研究者の間での回覧性が悪いという問題がある。縣らの上記研究を引き継ぐ形で、2007 年以降、日本で発表された査読を経た天文教育研究論文 105 件（2019 年 5 月までの数）を調査した。先行研究・実践の上に積み上げていくための資料として教育実践研究では必ずしも査読を経た研究論文だけが使われているわけではないが、ここでは査読を経た研究論文として日本ではどのような傾向を持っているのか俯瞰するという目的に絞った。結果は以下の通りである。(1) 掲載雑誌は、掲載数が多かった順に地学教育、理科教育学研究、科学教育研究、天文教育、日本教育工学会論文誌、情報文化学会誌と続いた。(2) 児童・生徒・大学生向けの教材開発・実践と教職員向け研修の開発・実践は、3:1 の割合である。(3) 教材開発や実践の内容として、月の満ち欠けは全体の 3 分の 1 近くを占める。(4) 大学教員以外に、小学校、高校教員が主著者として目立つ。学生（院生、post-doc）からの寄与が小さい。(5) 南米の天文教育専門誌 RELEA での統計（Bretones at al. 2016）や IAU meeting での統計（Bretones and Neto 2011）では、学校種を小中高と並べるとその順に研究論文数が多くなるが、日本ではその反対の傾向となっている。(6) Lelliot and Rollnick（2010）による欧米での天文教育研究の傾向調査と比べると、Sun-Moon-Earth system の概念を扱うところは同じく頻度高いが、日本ではこのうち、地球そのものの概念に焦点化したものは少ない。この調査研究は日本天文教育普及研究会の論文アーカイブ WG の活動のひとつでもある。